

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 11 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520220

研究課題名(和文) 詩歌のジャポニスム 西欧における展開と日本モダニズムへの接合に関する研究

研究課題名(英文) Japonism of Poetry: Its developments in the West and the connection with the Modernist Movements in Japan

研究代表者

坪井 秀人 (Tsuboi, Hideto)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：90197757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本の短詩型文学、特に和歌が西欧語に翻訳され、その翻訳テキスト歌曲として作曲された過程をドイツ語・東欧諸語・フランス語の翻訳テキストによる歌曲作品を対象に調査し、20世紀初頭、1930年代まで独逸仏および東欧・北欧地域の作曲家による歌曲作品のリストを作成し、その波及の実態を考察した。資料調査は日本国内の図書館、海外ではウィーンのオーストリア国立図書館、ベルリン州立図書館およびプラハのチェコ国立図書館などの海外の図書館と国内の大学図書館を中心に行い、その研究成果として日本語版論考を学術雑誌に発表し、そのドイツ語版を、本年中にスイスの出版社から刊行される論集に発表する予定である。

研究成果の概要(英文)：In this project, I carried out a survey the works of art songs in German, east european and French speaking areas in order to clarify the historical process of how Japanese short verses. especially Waka poetry were translated into the western languages and of how these translated texts were composed as the art songs.

After that I draw up a list of the Waka-songs composed by the German, Austrian, French and east-and-northern composers in the period of 1910s to 1930s and examined the state of their spread in Europe.

My survey was made at the Japanese libraries as well as abroad, at Austrian National Library in Vienna, Berlin State Library in Berlin, and Czech National Library in Prague. As some products, I published a Japanese article on the academic journal and will publish a German version article as one chapter of a collection of essays which will be issued by Swiss publisher in this year.

研究分野：日本近代文学・文化史

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：短詩型 翻訳 ジャポニスム モダニズム 和歌 歌曲 ストラヴィンスキー 山田耕筰

1. 研究開始当初の背景

ジャポニスム (Japonisme) に関する研究は国内外ですでにかなりの蓄積があり、わが国でもこれまでに刊行された研究書等の関連出版物や論文の発表は少なくない。しかしながら、それらの大半は美術史に関する調査研究であり、ピエール・ロティなど特定の作家に関する比較文学的研究をわずかな例外とすれば、文学に関する研究はきわめて少ない。特に詩歌におけるジャポニスムの動向については、近年、ジュディット・ゴーチエの和歌集『蜻蛉集』*Poemes de la libellule* が復刻されるなど、今後関心が高まる気配はあるとはいえ、資料調査から批評までのすべての作業が遅れているというのが、研究開始当初の時点での状況であった。

グラフィックなど美術におけるジャポニスムの問題については、研究代表者も、ジャポニスムの画家エミール・オルリクがその日本体験に基づいて刊行した『日本便り』*Aus Japan* について解説を書いているが(『名古屋大学学報』382号、2002) そのオルリクにして『明星』のような文学メディアと接点があり、なおかつラフカディオ・ハーン作品集のドイツ語訳の装丁を担当したことに明らかのように、ジャポニスムは様々な芸術ジャンルが交差するところに生起していた運動であったことを見逃すべきではない。今回申請する研究課題は、これまで日本近代文学史からはもとよりジャポニスム研究からもほとんど閑却されてきたに等しい、日本の短詩型文学とその歌曲化という、文学(詩歌)と音楽とが交差する場所にジャポニスムが豊かな形で成立していたことを資料調査をもとに検証し、その文学史的かつ芸術的な意義を明らかにしようとするものであり、従来の研究史の空隙を埋める先駆的な研究として位置づけることが出来る。

すでに研究代表者はオーストリア国立図書館所蔵の楽譜資料の一部を調査し、その成

果の一部を「和歌とミニアチュール ジャポニスムと山田耕筰」(単著、『現代詩手帖』、思潮社、第41巻第5号1998年5月)という論考に発表して、当該主題についての基礎的な調査と研究を行っており、さらに資料を収集することによって調査を充実させる準備を行っていた。

それ以降も、2008年、プラハのカレル大学でのワークショップ「ヨーロッパ・モダニズムと近代日本文化」で「ジャポニスムと歌」と題して報告し、新しい調査の結果を追加して、西欧と日本のモダニズムへのこの運動の反映について考察しており、それらの調査や海外の研究者との議論を踏まえながら、文献資料の範囲を拡げて、より包括的に研究することが必要であるという判断に至った。一方、近代日本の歌曲や唱歌・童謡等についても継続的に研究を行い、その成果は著書『感覚の近代』に収録している。

2. 研究の目的

19世紀から20世紀にかけての世紀転換期以降、西欧において展開したジャポニスムの芸術運動が和歌・俳諧といった日本の短詩型文学の翻訳移入と深く関わっていた事実、さらには西欧諸言語に翻訳された日本の詩歌の一部が歌曲として作曲された事実に着目し、それらの歌曲作品が斬新なミニアチュール様式として世紀末芸術やモダニズム芸術の運動にも新しい刺激を与えた様相について明らかにすることを目的とした。

本研究では、ドイツ語圏を中心とする西欧と東欧地域における日本の短詩型、特に和歌の翻訳とその重訳の過程を調査し、それがさらにどのように作曲家たちによって歌曲として作曲されたのかの全体像を明らかにし、それが西欧モダニズムにジャポニスム運動の一端としてどのように接合されたか、ひいてはそれが日本のモダニズムに還元される

に際して西欧モダニズムとどのような差異を生じるに至ったかを分析することを目指した。

3. 研究の方法

19世紀から20世紀初頭にかけての世紀転換期の西欧における、和歌・俳諧などの短詩型を中心とする日本の詩歌の西欧語への翻訳について調査し、テキストを収集した。ドイツ語圏を調査対象の中心に据えたのは、これまでの翻訳詩歌のテキストの歌曲化の調査においてかなりの数のドイツにおける事例を見出していたからであり、同時期の他の西欧地域に比べて歌曲文化の際だった豊穡さが確認されたからである。舞台芸術においてはドイツ語圏以外の地域でジャポニズムの音楽的系譜を辿ることは容易だが、短詩型詩歌の歌曲化という状態に関しては、チェコ語やフランス語、ロシア語の用例を除くと、ドイツ語における事例が際立っていると考えられる。こうした今までの調査経験から得られた知識と観察を基に、ドイツ語翻訳に焦点をあて、ドイツ語圏の図書館や関連するアーカイヴ等で短詩型詩歌の翻訳書について調査を行った。さらに歌曲化された作品の楽譜についてはオーストリアおよびドイツのアーカイブや音楽大学の図書館をも調査の対象とした。

上記の調査で収集した翻訳詩歌のテキストのリストを作成し、それぞれのテキストの成立の背景を研究した。具体的には複数の翻訳間の先後関係を明らかにすることと、異なる言語間のテキストについては重訳の過程についても調査し、分析するという方法で作業を行った。調査によって収集した歌曲化された作品のリストを作成し、作曲された詩歌テキストの出典を可能な限り明らかにするとともに、テキスト選択の傾向についても分析を試みた。その上で、翻訳テキストにおいて文学的な意味においてジャポニズムの性格がどのように現れているか、また歌曲作品

において音楽的にどのようにジャポニズム的な傾向が現れているかを分析した。また同時期のオリエンタリズムの別の一角を成す中国趣味(シノワズリー)との比較分析、特に漢詩の翻訳との比較も視野に収めた。

上記の調査によって収集された翻訳詩歌集に対して、世紀転換期以降1930年代までの日本の詩歌の動向が同時代的に共振するところがあったかどうかを調査した。作品の創作にジャポニズム的な思潮がどのように反映しているかについても、短詩型や近代詩、散文作品をも幅広く調査した。また、歌曲化された翻訳詩歌との関係から、同時期における日本の短詩型に作曲された歌曲や歌謡の作品の調査を進め、それがジャポニズムとどのような関連があるかについても考察した。すでに山田耕筰の『幽韻』その他の作品については分析を始めていたが、他の作曲家や関連する芸術家にも視野を拡げて調査を行った。以上の調査は上記の海外機関における調査と併行して研究期間中に継続して行う。西欧における歌のジャポニズムの運動が、ミニアチュール様式という方法論において、同時期に活発化するモダニズム運動に接続する傾向があることは、『幽韻』の分析においてすでに行っていることだが、両者の接続関係を、舞踊や美術等の複合的ジャンルへの影響を視野に入れながら、より詳細かつ総合的に解明しなければならない。このことを解明することが本研究の最終目的となった。

具体的には国内外の図書館によって文献および音楽資料を調査し、翻訳テキストおよび歌曲作品についてリストを作成し、それをもとに歴史的な実証研究を行う方法をとった。特にウィーンのオーストリア国立図書館、ベルリン州立図書館では重点的に調査を行った。

4. 研究成果

ドイツ語圏では日本にお雇い外国人とし

て滞在したカール・フローレンツの訳業が基点となり、それを受けて訳著を刊行したパウエル・エンダリング、そしてオリエント全般の文学を対象に大量の翻案を残したハンス・ベートゲによるテキストがそれらの作曲の基になっていることが判明した。そしてこれらのドイツ語訳がロシアやチェコなどの東欧圏に重訳されて拡がっていったことも確認出来た。また作曲例ではオーストリアとドイツにおいて、おびたしい和歌歌曲が作曲されていたこと、それに加えて、ロシアやチェコ、ポーランドといった東欧地域の作曲家が積極的に同じ和歌歌曲を作曲していたことが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

・坪井秀人「作者の決闘 「女の決闘」における翻訳/翻案」 2011年6月 『太宰治研究』第19号 37-51

・坪井秀人「歌謡とジャポニスム」 2011年7月 学会会報 第889号 50-54

・坪井秀人「遠さ あるいはアウラの向う側へ 前期『月の吠える』の詩の風景」 2013年10月 比較文学研究 第98号 17-34

・坪井秀人「ナルシスの自己証明 短歌時代の萩原朔太郎」 『開館20周年記念・前橋文学館特別企画展 詩壇登場100年 萩原朔太郎、愛憐詩篇の時代 彷徨、浪漫、哀傷』カタログ(萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち前橋文学館) 2013年10月

・坪井秀人「モダニズムのなかの 和歌-歌曲 ストラヴィンスキー、山田耕筰その他」 2014年3月 JunCture(超域的日本文化研究)第5号 130-153

[学会発表](計 0件)

[図書](計 6件)

・坪井秀人『性が語る 20世紀日本文学の性と身体』、単著、2012年2月、名古屋大学出版会、総頁682

・山口俊雄・坪井秀人ほか『日本近代文学と戦争 「十五年戦争」期の文学を通じて』、共著、2012年3月、三弥井書店

・小松史生子・坪井秀人『東海の異才・奇人列伝』、共著、2013年4月、風媒社

・坪井秀人・紅野謙介『コレクション戦争と文学 別巻 典 戦争と文学 案内』、共著、2013年9月、集英社

・坪井秀人・中村三春『現代女性作家読本17 桐野夏生』、共著、2013年11月、鼎書房

・伊豫谷登士翁・平田由美・坪井秀人『「帰郷」の物語/「移動」の語り 戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』、共著、2014年、平凡社

[産業財産権]
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 (坪井 秀人)

研究者番号: 90197757

(2)研究分担者 なし
()

研究者番号:

(3)連携研究者 なし
()

研究者番号: